

2000 年度公開講演会(2000.12.5)

白衣とジェンダー

—現代医療の現場から—

三浦 雅弘 (立教大学文学部 教授・公開講演会司会担当)

立教大学ジェンダー・フォーラム主催による毎年恒例の公開講演会は、12月5日の6時より最新の8号館8202教室にて行われた。本年は、「白衣とジェンダー：現代医療の現場から」と題して、群馬大学医学部より医学基礎講座助教授の服部健司氏をお迎えした。服部氏は、医学部を卒えられて3年間精神科医を務められた後、さらに哲学を学部から大学院博士課程まで学ばれた気鋭の医療哲学者である。

ご講演は三部構成をとり、まず総論的に、「白衣とジェンダー」という題から想定される人間関係が類別された。氏は群馬大学の学生たちにも尋ねてみたそうであるが、一般には「医師－患者」関係の中の「男性医師－女性患者」とか、「医師－看護師」関係の中の「男性医師－女性看護師（いわゆる看護婦）」といったパターンが連想されやすいであろう。看護師間であれば、女性看護師ならぬ男性看護師の養成所は数も極めて限られており、彼らのための産婦人科実習は一般に実施されていなかった、という近い過去の状況も紹介された。しかしこれらのパターンについてのジェンダー論的分析は、すでにある程度蓄積されつつあることも事実である。

そこで続く第二部では、われわれ医療を受ける側の者がその実状をあまり知ることのない、「男性医師－女性医師」の対比のうちに窺われるジェンダー論的問題が主題として取り上げられた。この国ではこの領域にかんしてまだ十分な研究・調査が積み上げられていないこともあって、氏はアメリカで今年出版された、医師を志す女性のためのガイド書に盛られたデータを参考に引用しながら、話をすすめられた。かの地ではすでに医学生時代において、男子には専門分化・上昇志向が強いものに対して、女子には地域医療や保健教育や心理的ケアに関心が高い傾向があるという。伝統的に平等・公平な対人距離が重んじられる医学部の男性的体質の中では、対人的感情に気を使いがちな女子医学生は、研修開始前よりとまどうことも多いらしい。また、女性医師が医業と家庭との両立に苦しむとか、外科系を選択しにくいとか、教授職にある者のうちわずか2%にも満たない（日本の大学全体では女性教授は約7%）といったこの国の事実はわれわれにも想像がついた。しかし、トロント大学での調査によると、女

性研修医の 88%が患者から、71%が看護婦から、70%が指導医差別的な扱いを受けたと報告し、56%が患者からセクシュアル・ハラスメントを受けているというカナダでの調査結果には誰もが驚いたのではないだろうか。ちなみに指導医からは 35%、同僚からは 30%の研修医が被害を受けているという。こうした数字は日本の医療現場とかけはなれたものだろうか。

最後の第三部では、疾患(?)についてのジェンダー論的分析の一例として、月経をめぐる言説の変遷が紹介された。18世紀までは自然現象として肯定的に捉えられていた月経は、19世紀に社会が都市化され産業化されてゆくなか女性が職や参政権を得ようとする、それを抑えようとする男性によって、男性に対する女性の劣位の根拠と用いられるに至る。そして1931年には「月経前緊張」という医学用語が生まれ、さらには「月経前症候群」という診断名が公認される。むろん男性にも、禿頭や勃起困難といった男性のみを対象とする医療が施されている。しかしそれらが女性的観点による医療とは言えないのに対して、月経の医学的扱いの歴史は、男性的観点による女性身体の過度の医療化を端的に表しているという点が指摘された。

OHPを用いられての約50分にわたるご講演は、たいへん明快でお手並み鮮やかなものだった。お話を頂戴するや、会場の熱気に押されて(司会が忘れていたということもある)休憩もはさまずにただちに質疑応答に移った。来会者は50名前後であったが、質問の挙手は、8時をだいぶまわって閉会せざるを得なくなるまで、ついに途切れることがなかった。その理由のひとつは、ヴェテランの男性産婦人科医、医科大学の医療倫理担当者、もと看護師でいまは本学コミュニティ福祉学部に通う女子学生、さまざまな分野の現役学生、卒業生、大学院生など、多岐にわたる意識の高い聴講者が集まったことにある。しかし最大の理由は、初秋より目白押しのスケジュールとかねてお聞きしてはいたものの、11月の終わりにも京都でのエイズ学会、その後は都内での医科大学倫理委員会と文字どおり多忙を極めるさなかでの本学来校をご快諾いただき、われわれがふだんはなかなか知る機会のない意義深い内容のご講演をたまわった服部氏の人徳にあらう。質問も医療倫理の将来を問うものから、もと精神科医としての氏に助言を求めるものまで本当にさまざまだった。それらの数ある質問に、疲れの色も見せずといねいに的確に答えられる氏の姿はほとんど感動的であった。終了後、近くの「寿司善」での会食希望者を募ったところめでたく10名余りにのぼり、11時近くまで遠来の服部氏をねぎらいつつ楽しいひとときを過ごし、一同再会を約して氏をお見送りした。後日耳にしたところでは、アンケート結果として来会者の90%が「大変満足」にしるしをつけ、これは新記録だそうである。